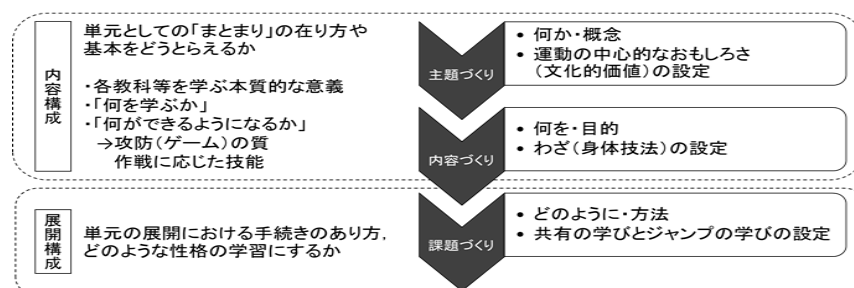


1. 教科として大切にしていること

生徒指導提要の改訂に伴い、学習指導と生徒指導との関係性は一層重視されるようになった。文部科学省が実施した令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果によると、不登校児童生徒及び自殺者は増加の一途をたどっている。それらを踏まえ生徒指導提要では新学習指導要領の趣旨を鑑み「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体とし、常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導の必要性を強調している。石村・山西（2007）は、保健体育科教員は生徒指導・部活動顧問のイメージが強いことを明らかにしている。しかし、学習指導を行う教員としてのイメージは少ないことも指摘している。学習指導と生徒指導を一体として捉える必要性が求められる今だからこそ、改めて学習指導として保健体育科が大切にしていることを問い直してみる。

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が掲げられた。この改善は単に授業の方法や技術を意図するものではなく、生徒に目指す「資質・能力」を育むために「主体的な学び」，「対話的な学び」，「深い学び」の視点で授業改善を進め，「何ができるようになるか」，「何を学ぶか」という学びの内容論が重視されたものである。そこには，教育内容の意味を所与の知識として教科書の中や教師の頭の中に存在するものではなく，教師と子ども，あるいは子ども同士の相互主体的な実践があって初めて生成され構成されることを学習ととらえる「社会構成主義的学習観」が背景となっている（広石，2005）。社会構成主義的学習観として学習の意味を子ども同士の相互主体的なかかわりの中で構成する授業を目指す際に，保健体育科の学習として「運動の中心のおもしろさ」は何かについて検討する必要がある。中学校学習指導要領では，各種目による目標は記されているが，いずれもそれぞれの運動が有する文化的価値には言及されていない。保健体育科の授業において深い学びを実現するためには，各運動の文化的価値を検討し，単元を構成していくことが必要となる。

単元構想は，内容構成と展開構成の2つから構成されている（青木，1995）。特に，単元としての「まとまり」のあり方や基本をどのように捉えるかをさす内容構成は，各教科等を学ぶ本質的な意義や「何を学ぶか」，「何ができるようになるか」，さらには各領域の運動のねらいや技能に大きく関係してくる。内容構成の具体的な設定は①主題づくりとなる運動の中心のおもしろさ，文化的価値の設定，②内容づくりとしてのわざの設定（第1図）の2つから成り立っている（岡野・山本，2012）。これらの，単元の展開における手続きのあり方やどのような性格の学習にするかを示す展開構成の核として，課題づくりを中心とした環境のデザインを保健体育科として大切にしている。



第1図 「体育における対話的学び」の授業デザインの手順（岡野・山本，2012）

2. 教科研究の歩み

第 29 次研究では、「情報が持つ意味をクリティカルに考える力」，「事象の中から課題（問題）を見つける力」，「自己や対象を自分らしく表現する力」，「相手の意見を理解するために聞く力」，「相手が聞きやすいように話す力」この 5 つの資質・能力を伸ばすための手立てとして，「対話的な学び」「パフォーマンス課題の設定」を大切にした授業作りを進めてきた。

「対話的な学び」では，岡野・青木（2018）の体育における「対話的な学び」を援用しながら，「①対象（運動）との対話」「②自己との対話」「③他者との対話」の 3 つの対話を大切にした。「パフォーマンス課題」については，「運動の中心적なおもしろさ（文化的価値）を仲間と共に深く探求する課題」と定義し，単元の中で課題を設定してきた（西ら，2018）。

第 30 次研究では，生徒の資質・能力を伸ばすために，グループ活動での対話や思考の変化に着目した課題設定や発問，関わり方を検討した。その成果として「共にスポーツを学ぶ場へ参加（体育授業への参加）」，「共にそのスポーツの文化的価値を学ぶ場への参加（文化的実践への参加）」の 2 つの学びの場への参加が明らかとなった。しかし，STEP との関わりや教科横断的に生徒の資質・能力をどのように育み，どのように見取っていくのかについて深めていくことが課題となった（平松ら，2021）。

以上のことから本次研究では，資質・能力を伸ばすために「運動の中心적なおもしろさ」を大切にしながら，教科横断的に生徒の資質・能力を育むための保健体育科としての役割を明らかにする必要がある。その際，どのように育み，どのように見取っていくのかを新たに保健分野も含めて検討する。

3. 資質・能力の育成を図る手だて

（1）8 つの資質・能力と保健体育科

本校では，資質・能力を伸ばすための手だてとして，生徒自らが自分の学びを振り返るための「まなびスケール」を用いている。第 30 次研究を経て，6 つの資質・能力に新たに【協働】，【伝達・発信】が加えられた。保健体育科では，8 つの資質・能力の育成に関わって，保健体育科における資質・能力が伸びる学びを以下のように設定した。

体育では，しばしば「できる／できない」に焦点が当てられ，「できる子ができない子に教える」という図式が生じる。しかし，松田（2016）は夢中という体験は多くの場合「できない」ことを「できるようにしよう」として「がんばっている」ときに出てくるものである。「できないからこそ面白い，できないからこそチャレンジしてみたい」という感覚を育むことが重要である，と述べている。そのためには，できる子からできない子へ教える学習ではなく「こんなことができるようになりたい」，「どうしたらいいの？」と尋ねる，援助要請から学習がスタートしていることが必要である。そして，この関わり合いの中では【協働】【伝達・発信】が不可欠になると捉え，保健体育科で育みたい資質・能力として設定した。そして，一人では達成できない課題や場の設定を行うことで，資質・能力の伸長を図る。例えば，陸上競技（ハードル走）では中心的な面白さを「障害物をスピード維持しながらリズムカルに走り越す」と捉え単元を構成する。課題は「隣のレーンに勝とう」とし，自身が走る 30m のレーンには 3 台のハードルを設置し，隣はフラットレーンとする。その際，フラットレーンは走る距離を伸ばしハンデをつける。すると，ハードルレーンを走る「私」は隣のレーンを走る「他者」に負けないようにと疾走感が生まれ，1 人では生まれることのなかったであろう，最小限の動

きでハードルを走り越し、インターバルをリズムよく駆けていく動きへと変容したのである。

また、活動の中で起こる様々な事象における【問題発見】、その解決に向けた方策を考える【アイディア】、それを踏まえた【根拠】、そのことについて検証をする【じっくり・いろいろ】、実践を行う【問題解決】、自己やチームのフィードバックを図る【振り返り】を学びの中で設定した。

（２）STEP とのつながり

保健体育科とSDGsの内容面での関りは保健や体育理論に散見される。「平和」については「国際的なスポーツ大会とその役割」で関わりがある。「環境」については「健康と環境」で関わりがある。「防災」については「傷害の防止」で関わりがある。その他、教科全体を通じ「心と体を一体として捉える」教科目標に準じると、災害時のストレス対策や平和を実現するためにスポーツを通じて合意形成を育むなど内容面における保健体育科の関わりは深い。

また、行動面については他者と協力する力に関わる【協働】【伝達・発信】を中心に捉えている。ペアやグループ活動をする時には、他者を尊重し合えることや他者と学び合える空間・時間を大切にしてきた。その結果、上手くできなかった時や活動が停滞した時に、それに対する助言や温かい言葉をかけ合える関係性を築いてきている。生徒が捉えている保健体育科とSTEPとの関わりについては「協力して、技とか動きとかを良くするために考えるとき」や「チームスポーツで協力するとき」と記述している。班の中で協働し、課題の本質は何かに対して多面的・多角的に思考・判断を巡らせ、解決していこうとする力がSTEPでのグループ活動の中で大きく関わってきていると推察される。

本校では、全体編にもあるように総合的な学習の時間に「STEP」という探究学習に取り組んでいる。その中で得た知識やプレゼンテーション力などの経験は、保健体育科の授業内でも活用されているように感じている。仲間とともに課題の発見と解決に向かって授業を展開していく中で、他者に考えを伝える、状況に応じた役割や作戦の案を伝える場面が多く見受けられるようになり、ねらいとしている資質・能力を向上させることにつながっているといえる。

4. 実践例

（１）主題（単元・題材）名 E 球技 イ ネット型 バドミントン

（２）目標

- ①バドミントンについて、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームを展開することができるようにする。〔知識及び技能〕
- ②ゲームにおいて、自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けての運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。〔思考力、判断力、表現力等〕
- ③バドミントンに自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、作戦などについての話し合いに貢献しようとする、一人ひとりの違いに応じたプレイなどを大切にしようとする、互いに助け合い教え合おうとすることなどや、健康・安全を確保することができるようにする。〔学びに向かう力、人間性等〕

（３）単元の評価規準

知識・運動		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ・勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、発言したり書き出したりしている。 ・バドミントンで用いられる技術には名称があり、それらの使い所があることについて、学習した具体例を挙げている。	○技能 ・基本的な技能を身に付け、正確にシャトルをとらえ、コントロールすることができる。 ・狙った場所や空いている場所に打つことができる。	・空いた場所をめぐる攻防に向けた自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫している。 ・自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	・作戦などについての話し合いに参加しようとする、仲間と互いに助け合い、教え合おうとすることなど、バドミントンに自主的に取り組んでいる。 ・健康、安全を確保している。

（４）STEP との関わり

①各教科としてのとらえ

保健体育科では、STEPの活動に向けて、SDGsの要素を取り入れた授業を計画的に配置しながら、関連付けている。内容面での関わりでは「環境」については「健康と環境」、「防災」については「傷害の防止」など、保健分野との結びつきが強い。行動面での関わりでは「質の高い教育をみんなに」に関連づけて「どこでも」「誰とでも」スポーツに親しめる授業づくりをしている。体育分野ではチームやペアの組み替えを行い、他者との関係性を重要視し【協働】に取り組んでいる。「協力して、技とか動きとかを良くするために考えるとき」と生徒からの記述があることを踏まえ、バドミントンにおいても、仲間と互いに助け合い、教え合おうとする姿が表出することを期待する。

②育成したい資質・能力について

空いた場所をめぐる攻防の中で、自分が得点をした場合と失点をした場合の【問題発見】、ゲームを観察している生徒からのアドバイスにおける【伝達・発信】、自分での気づきをゲームの中で実践できる【問題解決】の資質・能力の育成を図る。

（５）指導について

運動技能を高めることだけを目指すのではなく、豊かなスポーツライフを実現するためにも、本単元で扱うバドミントンの中心のおもしろさを「返す—返させない」の関係の中で、攻撃時の「空いた場所をねらう」とことと、守備時の「空いた場所をつくらない」とことと捉える。そして、この２つの攻防に焦点を置き、内容を構成した。また、体育分野では、運動を学んでいくという特性上、多様な他者と関わりあいながら学んでいくことが中心となるため、【協働】の資質・能力が表出されやすい教科である。その特性を生かし、本実践では【問題発見】、【伝達・発信】、【問題解決】の３つの資質・能力に着目して本時の展開を考えた。まず、単元前半では、ペアでのラリー練習を中心にラケット操作の身に付けさせた。さらに、ハイクリアとヘアピンのショットを中心にコートに制限をかけ、前後の空いている場所を意図的に意識させて行った。本時では、初めて正式なコートの広さでゲームを行い、前後の動きに加え、左右の動きも取り入れる。その結果、複雑な運動技能が求められると予想する。ゲームを通じて、その複雑さを克服するために、活発な意見交流のもと、【伝達・発

信】を表出させたい。また、アドバイスをもらうことで【問題解決】の資質・能力を引き出せるようにしていきたい。

(6) 指導と評価の計画 (全6時間)

○「評価に用いる評価」

●「学習改善につながる評価」

時間	□ねらい ■学習活動	知	思	態	評価方法	育成したい 資質・能力
第1時	□ルールや基本的な技能について理解する。 ■縦長半面コートで相手コートに打ち返す。		●	●	●行動観察	【発】 【協】
第2時	□基本的なラケット操作を身につける。 ■前後の空間を意識したゲームを行う。	●	●		●行動観察	【発】 【伝】
第3時	□空いた空間を狙うためのショットを理解する。 ■前後の空間を意識したゲームを行う。	●	●		●行動観察 ○ロイロ ノート	【発】 【伝】
第4時 (本時)	□空いた空間を狙うためのラケット操作を身に付ける。 ■前後、左右の空間を意識したゲームを行う。	●	●	●	○行動観察 ○ロイロ ノート	【発】 【伝】
第5時	□空いた空間を狙うためのラケット操作を身に付ける。 ■前後、左右の空間を意識したゲームを行う。	○	○	○	○行動観察 ○ロイロ ノート	【解】 【伝】
第6時	□習得した技能を試合で発揮する。 ■チーム対抗戦を行う。	○	○	○	○行動観察 ○ロイロ ノート	【解】 【伝】

※育成したい資質・能力の表記は省略した名称で記述している。

根拠 ⇒ 【根】、じっくり・いろいろ ⇒ 【じ】、 アイディア ⇒ 【ア】

問題発見 ⇒ 【発】、 問題解決 ⇒ 【解】、 振り返り ⇒ 【振】

協働 ⇒ 【協】、 伝達・発信 ⇒ 【伝】

(7) 本時の指導

①目標

- ・相手側のコートの空いた場所や狙った場所に打ち返すことができる。 [知識及び技能]
- ・自分自身や班員の課題を見つけ、積極的に話し合いに参加することができる。

[思考力、判断力、表現力等]

②指導計画 (50分)

学習活動	○指導上の留意点 ◆評価	育成したい 資質・能力
1. 挨拶、出席確認、健康観察、 服装チェックをする。	○生活班で並ばせる。 ○体調不良等で見学者がいないかを確認する。 ○服装や靴紐のチェックをする。	

2. 本時の流れの説明をする。		
3. ほぐしの運動を行う。	○簡単な体操を行う。 ○フットワークを行う。 ○ペアになりラリーを行う。 ○安全面やラケット操作について適宜，巡回し助言する。	【協】
4. 本時のめあてを確認する。		
空いた場所を狙おう		
5. 1 回目のゲームを行う。 〈ルール〉 ・シングルス ・1 分 30 秒で行う ・サーブミスは 2 回まで打ち直し	○試合を見ている者は，どこを狙う・狙われているか アドバイスを送らせる。 ○シャトルの速度，人の動きに着目させる。 ◆班の中で，空いた空間をめぐる攻防に向けて自らの 考えを伝えようとしているか。(思)	【問】 【解】 【伝】
6. ゲームの課題から班で解決 に向けた練習を行う。	○ゲームを終えて，課題を見つけ，解決のための 練習をさせる。	【問】 【解】 【伝】
7. 2 回目のゲームを行う。 (ルールは同上)	◆バドミントンの基本的な動きを理解し実践し，空いた 場所をねらうことができている。(技) ◆ 空いた空間をめぐる攻防に向けて，仲間に助言をし たり，教え合おうとしたりしている。(態)	
8. 本時の振り返りを行う。	○ゲームを終えて，感じたことを出し合う。 ○体調とけがの有無を確認する。 ◆ロイロノートに，活動を通して得た学びを書いている。 (思・態)	
9. 片付けをする。		

5. 成果と課題

(1) 成果

本次研究では，「運動の中心のおもしろさ」を大切にしながら，STEP に関わって生徒の資質・能力を育

むための役割を検討した。保健体育科として【協働】に焦点を当てながらグループ活動での対話や思考の変化に着目した課題設定、関わり方を続けた成果として以下の内容が明らかになった。

①「協力・協働」しながら学習へ参加する姿

課題設定を他者と協働して解決を目指すものに設定することで、一人では達成することのできない課題となり、必要に応じた関わり合いが促された。例えば、実践例に挙げられた授業内では以下のような場面があった。

ミズタニは卓球の熟練者であり、ネット型競技への理解が深い生徒である。ミズタニはシャトルを返球する際に、最小限の歩数で落下地点へ移動し、腕を伸ばして体の前でシャトルを返球するラケット捌きを行うことができる。対して、同じ班のオノダは運動経験に乏しいが授業には一生懸命に参加している生徒である。オノダはシャトルを返球する際に、落下地点まで走って移動しシャトルを打ち返したり、頭の上や後ろでシャトルをオーバーヘッドストロークで返球したりしていた。試合の後、班の中で自分たちの技能を高めるための練習を行うように課題が提示された。ミズタニとオノダは少しの会話をを行い、練習に取り組みはじめた。ミズタニがヘアピンとロビングを交互に打ち、オノダがそれに応じて返球をしていた。練習の後、再び試合を行った。オノダは前に落とされたシャトルに対して、落下地点まで慌ただしく移動する様子に変化はなかったが、インパクトの瞬間に右手と右足を同時に出して腕をいっぱい伸ばして体の前でラケットを捌くことができていた。（生徒名はすべて仮名）

この場面において言語的な活動は少ないが、シャトルを1対1で打ち合うという非言語を通じての関わり合いがミズタニとオノダの間には存在した。そして、その関わり合いを通じてオノダの動きに変容が生じたのである。このように、他者の存在が自己の変容を促し学びへ昇華する姿が随所に見受けられた。また、ミズタニやオノダのように同質の能力でないペアや集団で組むことにより、【協働】が促進されたと推察される。

②【協働】がSTEPにも表れた姿

STEPでは各班が設定した研究テーマに応じて活動を進めている。テーマの多くは未解決課題をどのように解決していくかを検討し、時には外部団体にも協力を要請しながら研究を進めることもある。あるグループでは「このグラフの見方がわからんのやけど、どうやって解釈したらいいの？」という声掛けがあった。このように、研究を進める中で浮かび上がった疑問や資料の読み取りについて他者に援助を求める姿が見受けられた。わからないことをわからないと伝え、共に解決に向かう力が保健体育科でも大切にしている【協働】の姿である。授業の中でも、「サーブってどうやって打ったらいいの?」、「どうやったら勝てるの?」という会話が行われていた。保健体育科で伸ばすことを目指す資質・能力がSTEPの中でも散見されたことから、保健体育科の授業とSTEPを往還しながら資質・能力の伸長が図られていることが推察された。

（2）課題

本研究では、2つの姿について具体的な成果を得ることができた。しかし、【協働】が単なる助け合いに終始し「教える - 教えられる」の関係ではなく、援助要請に基づくものになっているか、また、生徒自身が「やってみたい」、「こんなことができるようになりたい」という思いのもとに学習が生起しているのかまでは言及できていない。さらに、生徒が「協力・協働」できている場面を見とり、さらに深い学びへと誘う手立てを講じる方策を検討する必要がある。このことはSTEPの中でも求められる教師のファシリテーターとしての役割とも通じることが予想される。以上より、援助要請に基づく【協働】による深い学びへの方策とSTEPにも通じる教師の働きかけが今後の課題となる。

〈参考文献〉

- HI 平松幸三・西 将伸・稲垣友裕（2021） 「保健体育科」三重大学教育学部附属中学校「研究紀要 社会の変化に対応できる生徒の育成－SDGsを核に資質・能力が伸びる取り組みをめざして－」第30集.
- HI 広石英記（2005） ワークショップの学び論－社会構成主義からみた参加型学習の持つ意味－.教育方法学研究, 31:1-11.
- I 石村雅雄・山西哲也（2007）体育科教員の役割意識について. 鳴門教育大学紀要, 22:51-60.
- MA 松田恵示（2016）遊びから考える体育学習. 創文企画, pp.30-33.
- MO 文部科学省（2017） 中学校学習指導要領. 東山書房.
- MO 文部科学省（2022） 令和4年12月 生徒指導提要
- MO 文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2022）令和4年10月27日「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」
- NI 西 将伸・稲垣友裕・平松幸三（2018） 「保健体育科」三重大学教育学部附属中学校『研究紀要 社会の変化に対応できる生徒の育成－対話的な学びによって資質・能力が伸びる授業－』第29集.
- O 岡野 昇・山本裕二（2012） 関係論的アプローチにおける体育の授業デザイン. 学校教育研究, 27: 80-92.
- O 岡野 昇・青木 眞（2018） 体育における「主体的・対話的で深い学び」に関する考察. 三重大学教育学部研究紀要教育科学, 69:259-266.